
魂が魂を呼び、魂によって解き放たれる

ハシルケンシロウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魂が魂を呼び、魂によって解き放たれる

【Nコード】

N4978C

【作者名】

ハシルケンシロウ

【あらすじ】

プロ野球団松阪ラダマンティスの正捕手大友孝則は、見舞いに行った少年から、8月14日の沖縄シュバルツ戦でパーフェクトを達成するリードを見せると要求される。だが、この日、とある事情でシュバルツの剣持外野手は神がかかるのだ。

前編（前書き）

この作品は夏ホラー2007に参加しています。

【夏ホラー2007】とサーチしていただきますと、他の先生方の作品全てにヒットいたします。

ぜひぜひ、様々な作品をお楽しみください。

風海先生より、一部年号が1997年になっている、ぐろわ姉妹（姉）先生より、湯島天神は藤原ではなく菅原だとのこと指摘を頂きまして、一部修正しております（＾Ｏ＾）

ではでは、命を賭けたパーフェクトゲームに対するプレッシャー、分かち合ってやってください（＾Ｏ＾）

前編

8月14日のシュバルツ戦 パーフェクトに抑えてください

解った この世に出来ないことなんて塵一つ無いんだってことを証明してみせるよ

【魂は魂を呼び 魂によって解き放たれる】

プロ野球団松阪ラダマンティス。そこには、伝説のキャッチャーミットがある。

伝説と言えば聞えはいいが、使用した者は己の命と引き替えにパーフェクトゲームを達成できるリードが出来るという、云わば【呪いの】キャッチャーミットなのだ。しかもパーフェクトは、一般的にはピッチャーの力量によって達成されるものであると勘違いされがちなため、呪いに触れて死んでいったキャッチャーはピッチャーの名前を売るための人柱としかならない。

実際はキャッチャーの力量が占める割合が七割近くに達するため、このような憤死はまさに犬死に以外の何者でもないことを、大友孝則捕手は嫌と言うほど理解していた。

だが、そのミットに孝則は手を出そうとしていた。死の病を患った少年と先週交した約束【8月14日の沖縄シュバルツ戦でパーフェクトゲームを達成するリードを見せる】というものを果たすために。

8月14日以外であつたなら球界最強と言われるラダマンティス投手陣を持つてすればこんな物に頼らずとも達成出来るのかもしれない。だが、この日はシュバルツの主砲剣持和俊外野手がとある事情で神がかかるのだ。

この男が【8月14日】に達成した記録をまとめるだけでもかなりの数になる。

一試合十五打点、六打席連続本塁打は日本記録であるし、他にも【セーフティーバント、二盗、三盗、ホームスチール】、サイクル出塁等といった珍記録もある。

なんと言っても圧巻なのが、昨年の【世界最大255m級バックスクリーン越え場外弾】だ。

この知らせを聞いて、8月14日にだけはシュバルツと当たりたくないとい心から願っていたのにこのザマである。しかも、この男を一度も塁に出すなという無理難題付きだ。

少年が助かるためには、かなりのハイリスクを伴う手術を受けなければならなかった。だがそれは、受けなければ100%死ぬが受けても成功率が40%であるというものの。

どの道助かる見込みが薄いなら体を傷付ける必要はないと主張する少年に、諦めるな、死ぬ気になればなんだって出来るんだと説いて聞かせた結果返って来たのがあの条件なのである。

《そこまで言うならまず、自分が不可能を可能にして見せる》

ということなのだろう。屋外球場であるため溶けるような暑さが漂う松阪デスマッチフィールドのブルペンに、孝則は一人、佇んでいる。

ブルペンの奥にある一室。そこには、傍迷惑なことに呪いのミットが御神体として崇め奉られている。

その昔、シュバルツを迎えた時にシュバルツの【自称陰陽師の子孫】門倉慶輔という靈感投手が

「なんか居るぞ、ぜってーあそこ、なんか居るって」

との騒ぎを起こし、除霊するだのしないだのといった大騒動に発展したこともあったが、結局そのまま呪いのミットは御神体として鎮座ましましていた。

神殿の前に立つと、靈感とやらが全く無い孝則にもブルペンでの蒸し焼きになりそうな暑さが信じ難いほどのヒンヤリとした初冬のような寒さが、発熱時に体の内側から感じ取っているような寒気として伝わってくる。

扉を開くと、元は器具保管室だったそこには機材は一切置かれていなく、神社の神殿宛らの神棚が組んである。火気厳禁であるため線香こそ焚かれてはいないが、しっかりとお神酒、お神樹が脇を固め、ミットの主森沢英勝捕手を象った彫像がお札を貼り付けられて安置されている。

恐ろしいほど本格的な神棚だ。こうも神格化された実在の人物は、

菅原道実か関羽雲長、あるいはボビー・バレンタインぐらいのものだろう。

ラダマンティスのみに伝わる【捕手神宮】への正式な参拝は、死を意味する。己の生命と引き替えに捕手の神、否、野球の神の能を借りるための儀式だ。今まで六人の捕手が森沢捕手を参拝し、全てがパーフェクトゲームで球界に名を残し、この世を去っていった。死因は、全て過労である。

参拝前に考えてみた。もしかすると、呪いの死角があるかも知れない。なぜ全員過労死なのかが解れば、孝則は呪いをかわせるかも知れないのだ。

その答えは、いとも容易く見付かった。御神体である森沢が過労死だったからだ。森沢もまた、重病に侵された少年からパーフェクトゲームを要求され、それを達成するリードを一週間寝ずに考え続け、達成した当日に自分の命と引き替えに少年の命を助けたのである。

過労死者に呪われるから過労死。至極当たり前な答えがそこにあった。

神棚に二礼二拍手を行った後、野球神召喚の呪文を詠唱する。

「森沢先輩、もう一度あなたの能を貸してください」

自分からコンタクトを願うことによって、該当する霊との波長にある程度近付くことが出来るらしい。案の定、ミットの脇に佇む森沢捕手の姿を確認できるようになった。

「少年、能を貸せてことは、君に取り憑いてもいいってことかい」
姿が見えたそばから恐ろしげなことを言ってきたが、おそらくは取り憑かなければ知恵を貸せない、つまり、知恵を貸すための最低条件が相手に取り憑くことなのだろう。孝則は無理矢理そう思い込むことにした。

「自分の能でなんとか出来ないのかい。君にだけは取り憑きたく無

いんだ」

言いたいことは解る。だが、孝則も引く訳には行かなかった。死人の力によって神がかかる者を三打席も打ち取るには、己自身も死人の能によって神がかかるしか無いのだ。だからこそ、死ぬと解つていて敢えてミットを使おうとしているのである。

「人の命がかかってますから。剣持さんを全て抑えるには、やつぱり森沢先輩が必要です」

と結論を述べる。

「死ぬよ？」

俺に殺す気は全く無いけど、俺の意思をダイレクトに伝えるためにはどうしても相手の神経をハックしなきゃ駄目らしいんだ。そうなると予め波長を合わせた君は、かなり早く疲れることになる。鍛え抜かれたプロ野球選手といえど、耐えきれないんだって前例は腐るほどあるけど、いいんだね？」

確かに動かめ前例は六つもあり、その中にはただの肝試し気分でジンクスに挑戦した体力系捕手も居たのだが、彼もきっちり、過労で逝ってしまった。

後にも先にも彼ほどの体力系は出て来ないだろうとまで言われていた男ですら、きっちり仕留める威力を持つ疲労である。もはや、無敵であるとさえ言っている。孝則のごとき頭脳系は、九イニング耐えきれるかどうかも微妙なレベルだ。

それでも彼は、ミットに手を出さずにはいらなかった。

奇跡を起こすには、まず奇跡があるのだということを目の当たりにすることによって【奇跡は人力で起こせるものなのだ】ということとを信じ込まなければならぬ。そして、あの少年の命を助けるには、彼自身に奇跡を起こしてもらつより他無いのである。

「構いません」

覚悟は……、決まった。

森沢捕手との契約を取り交わし、孝則は今、練習に出ている。燦々と降り注ぐ日射しが、とても眩しく……なかった。今までは眩しすぎてとても直視することなど出来なかった陽射しを何の苦もなく直視することが出来る。霊体に移られるとサングラスのような光線遮断フィルターが自然と掛るのだろうか。周囲の風景も、かなり黒ずんでいる。

孝則は今ベンチに控えている。初回の守備は、スターティングラインナップの発表で名前を呼ばれてから守備位置に向かわなければならぬのだ。

『九番 キャッチャー 大友孝則 背番号11』

うぐいす嬢のコールと同時にベンチから出る。そして、スタンドにサインボールを……投げ込めなかった。投げたボールはフェンスを直撃。そのままファールグラウンドに転げ落ちてしまったのである。

ここからスタンドまではどう多目に見積もっても、8mも無い。

これも消耗、疲労の一つなのだろうか。そうだとすると今日のゲーム、より一層ランナーを出すわけにはいかない。間違い無く走られ放題になってしまう。

直ぐさまボールを拾ってスタンドに投げ直す……ことも出来ない。何度投げててもフェンスに阻まれるばかりだった。

肉体自体にまだ疲労は感じていないが身体能力はあからさまに低下しているようだ。スタンドからは、笑い声、怒鳴り声、とても心配そうな声、様々な感情の籠った音色が何の脈絡もなく飛び交い始める。

とうとう見かねた辻一壘手がボールを拾って、スタンドに軽々と投げ込んでしまった。

年末の珍プレー集にほぼ間違い無く出てくるであろう無様な姿を晒した後、漸くホームベース裏にしゃがみ込むことが出来た孝則の後ろで、プレートアンパイアが手をあげ、プレイボールを宣言した。

一回の表、シュバルツの攻撃は、1番の剣持外野手からだ。今年の二月ぐらいからもう

「俺今年、FA宣言してメジャー行きますから」

と事あることに宣言しているこの男のことである。来年であればもうシュバルツには居ない筈なのに、なぜ今年なのだろう。今年であつたが為に、孝則は命を賭ける必要に迫られたのだ。

剣持の命綱は、藤堂初美とか言う亡くなってしまった元彼女が盆の期間中に降りてきているかどうかに尽きる。そして今日、8月14日は彼女の命日なのだ。だからこの男は燃え上がるのである。

「剣持さん、初美さん今年、来てますかねえ」

取り敢えず訊いてみた。

「おう、来てるってさ。なんかバックスクリンで待機して俺が線香花火打ち込むの待ってるらしいよ」

居るらしい。今年の剣持は、間違い無く神がかっている。

「でもなあ……、なんか気になるんだよ。お化けが側に居ねえと寒気はしない筈なのに、この打席の近辺も妙に寒いんだよ」

返事の後に、剣持はこう言葉を繋いでいる。当然この寒気の正体は、藤堂初美ではなく森沢捕手なのだが。試しに揺さぶってみることにした。

「初美さん、久しぶりに三振した剣持さんが見たいのかも知れませんかよ？」

と。

森沢さんは『取り憑く』と言っていた。にも関わらずその影響は視界にしか出ていない。いったい何が自分の命に影響を及ぼすというのだろう。

謎だ。

「なあ、森沢……」

自分の最大の異変に気付かされたのは剣持から掛けられたこの言葉だった。『森沢』と呼ばれたのだ。姿形は決して似ているわけでもないのに……。

「おまえ俺と同期なのになんで今更ですます調なんだよ」

剣持はなおも衝撃的な言葉を続ける。彼はもはや、100%孝則を森沢捕手であると認識しているようだ。

取り敢えず確認するしか手は無さそうである。孝則は、森沢に成

りきる事に決めた。

「なあ、オッサン、今年2007年だよなあ？」

「何言つてんだよ、1993年だよ」

1993年。それは、剣持、森沢の入団二年目、そして、森沢捕手の亡くなった年だった。

何かがおかしい。全ての辻褄が合わない。今日は2007年8月14日。なのに今年は1993年だと剣持は言う。そう言えば、シユバルツのユニホームが少し違う気がする。それに、剣持にも無精髭がなかった。

彼の言う通り幾らか昔にタイムスリップしてしまったことは確かだよ。

辻褄が合わないどころの話ではない。孝則はもはや、常識の全く通じない世界に放り込まれてしまったのだ。しかも、大友孝則ではなく森沢英勝として。

とにかく元の2007年に戻らなければならない。降り注ぐ日差しが眩しくない1993年8月14日。この非常識極まる世界に閉じ込められてしまったのである。

どうすればいいのか。それは、どういう経緯でこのアウトソーザーに迷い込んでしまったのかを正確に把握すること。そう判断した孝則は出来事を振り返り始める。

まず、重病の少年を見舞いに行つて『パーフェクトゲームを見せる』と言われる。

ここで何か違和感がないか考えてみた。有る。この少年に、どこかで会った事がある気がしてきたのだ。

誰だろう。この少年が無理難題さえふっかけてこなければ、自分はこの様な目に遭わずに済んだのに。

真夏の日射しは、その強烈さに似合わず場違いな程の寒気しか伝えてこない。そして、その寒気の中に、自分の感情によって発生した新たな寒気が混じってしまったことに、孝則は、とっくに気が付

いていた。

「タイム！」

プレートアンパイアが突然両手を振って、タイムを宣言する。いったい誰がそんなものを要求したのだろうか。周りを見渡すまでもなく、その正体は確認された。マウンドの上で、本来は大先輩である筈の坂牧投手が手招きしている。マウンドに行くと、グラブを口元に当てながら、

「何やってんすか、さっさとサイン下さいよ。なんか顔色悪いし、大丈夫ですか？」

とまくしたててきた。

坂牧の顔も、自分の知っている顔と比べると、べらぼうに若い。孝則は、気が狂いそうなのを必死に持ち堪え、

「ああ、悪い。なんせほら、剣持のオッサンが相手だろ。どーやって打ち取れるのか必死に考えてた訳よ」

と返すのが精一杯だった。

「まあ確かに怖い人ではありませんけどね。あまり怖がっていると大ボカしちゃいますよ」

剣持はまだ入団二年目。どうやらこの日に神がかかるということとは、全く浸透していないようだ。正直助かった。状況はどうであれ、パ―フェクトは達成しておきたい。

ホームベース裏に帰った孝則は、マスクを被り直し改めて配球を考え直す。

右足を左足より後ろに下がっている状態でバッターボックスの外側ギリギリまで引くことにより、真正面に向いてしまった上半身を無理矢理捻って半身の体勢に持つていく【プリンスパル打法】と名付けられた独特のオーブンスタンスで構える剣持だ。普段であれば、絶対的に外側の球には弱いのだが……。

試しに一球外高めギリギリに外れるシュートを要求してみる。

この要求に対し頷いた坂牧は、きつちりと要求通りのコースにボールを投げ込む。

かなりギリギリのところ投げ込んだ筈のボールを、剣持はさも当たり前のように見送った。

「やるねえ、オッサン」

今日の剣持には、釣り球は通用しないことがはっきりしたため、囁き戦術に切り替える。

「そついや、女つ気が全くねえけど、彼女つくる気あんの？
欲しいなら紹介するけど」

囁く内容は、なるだけ野球とは無関係なほうが良い。

「初美だけで充分」

予想していたことだったが、ここで見事に会話が途切れてしまった。

要求するボールは外低め一杯に入るカーブと決めている。問題は、剣持に何を囁くかだ。次なる話題をふっかける。

「そついや、コナンのあの方って誰だと思っ」

「博士だろ」

乗ってきた。空かさず坂牧にカーブのサインを出しつつ、剣持と話を続ける。

「じゃあ、組織から抹殺指令が出てるシェリーをあの方が匿ってる理由を説明してくれるか」

これはもはや、無理難題と言えるだろう。博士あの方説否定派の最大の根拠（感情論は除く）だ。剣持がこれを考え込んでくれれば、ワンストライクは確実に取ることができる。これが、囁き戦術の極意なのである。

坂牧も、孝則の囁き戦術に同調してクイックモーションから2球目を投げてきた。

「ットライー！」

アンパイアのコールで剣持は、初めて坂牧がボールを投げたことに気付いたらしい。目を皿のようにして、

「なんだなんだ!？」

とろろたえている。このゲームで剣持を力めるのは、このタイミングしかない、そう判断した孝則は、トドメを刺しにかかる。

「仕事中にあの方が匿う理由なんか考えてるおまえが悪いんだろ。とつと前向かねえと、また坂牧に投げられちまうぞ」

ボールを返しながら剣持に言い放つ。この打席の剣持を打ち取るのに、これ以上の言葉は必要とはしなかった。

真ん中高めに外したストレート、初球と同じ、ストライクからボールへ外れるシュート。剣持は、この二つのボール球を思い切りブン回し、敢えなく三振となる。

残る二人を軽々と打ち取った孝則は、ベンチに帰ってじっくりと現状分析を行うことにした。

真夏の日射しは相変わらず周りを闇の色に染め、薄気味の悪い肌寒さを体の内側から発散している。

空いた時間にまずやらなければならないこと、それは、トイレへ駆け込み、手洗い場の鏡に自分の姿を映すこと。このような狂った状況だ。自分がいたい誰であるのかを正確に把握しなければならぬ。

「俺ちよつと、トイレ行ってくるわ」

仲間に言い置いて早速実行する。

「いったい鏡は誰の姿を映し出すのだろう。大友孝則なのだろうか、それとも……。」

走る足がもつれる。高速移動中の足取りがおぼつかない。あまつさえ僅かながら吐気さえ催している。

トイレが近付くにつれ、それがはっきり判るほど強く強くなっていった。

目的地に到着した孝則は早速鏡の前に立つ。サラサラした細い黒髪、スラッとした細面、太くて薄い眉、色素の薄い薄茶色の瞳。どれを取っても大友孝則ではない。

そこに在るのは、紛れもなく命と引き替えに自分の命を救ってくれた、在りし日の森沢英勝だった。

鏡に映る森沢が勝手に口を動かす。逃げようにも、足の裏に根が生えたように全く動かせない。

「よう、少年。久し振りに見る命の恩人の顔はどうよ？」

寂しかったんだぞ。いや、それ以上に悔しかった。おまえがラダマンティスに入って六年も経つのに一度も会いに来てくれないんだからなあ」

孝則が森沢参りをしたのは、今回が初めてだ。それまでの六年間は、森沢が言う通り、意識的に参拝を避けていた。

「ありがとうって言われないからパーフェクト取った訳じゃないけどよ、せめて元気になった姿を見せに来るのが人情って物じゃねえのか！」

徐々に強くなっていく語気に、そこはかかない恐怖が沸き上がる。そう、森沢の個人的な感情により、問答無用で崇られているのではないのかと言う、回避不可能な恐怖が。

「それがなんだ!？」

ようやっとこさ来やがったかと思ったら、ありがとうも無しでいきなり力を貸せだあ!？」

今から思えば確かに失礼極まる要求だったかもしれない。だが、人の命がかかっているのである。あの時は、氣持に余裕が無かったのだ。

「ム力ついたから祟らせてもらったぞ。でも、せっかく命張って助けてやった命だ。助かるチャンスやるよ。」

このゲーム、パーフェクトに抑える。

当時の、一週間で五時間しか寝てねえ俺の疲労をそのまましょってなあ!」

《!》

一週間で五時間。とてもではないが、有り得る数値ではない。自分の命を助けるために森沢がこれほどの無理をしていたとは、孝則は思いもしなかった。

「取り溢しやがったら、おまえの命は森沢英勝の命として1993年8月14日に……、散るぞ」

この言葉が終わると同時に足で体を支えていられないほどの脱力感と目眩、吐気が一緒くたになって襲ってきた。

突然目の前の鏡が烈しい音を発てて砕ける。

朦朧とする意識の中、孝則は胸中で呪咀の言葉を吐きながらふらつく足を引きずってラダマンティスベンチへと引き返して行った。

続く

後編

孝則がベンチに到着して直ぐに貰った言葉は、

「なんだおい、大丈夫かよ。まさかおまえ、生命力まで便所に垂れ流してきたんじゃないだろうな!？」

だった。168時間中5時間しか眠っていないのである、そう見えるのも無理は無い。

「代わるか？」

心配したバッテリーコーチの有り難い言葉を首を横に振って無理矢理抑え込む。視界をぼかす白昼の暗闇が、心細さをなんの躊躇いもなく増幅させてくれた。

初回、ラダマンティスの打棒は爆発した。もう既にスコアボードには4と表示され、ツーアウトで、

『九番 キャッチャー 森沢』

という状況だ。

ふらつく足を引きずり、朦朧とする意識で打席に向かう。

右打席に立ち、バットを立てる。白昼でも暗い世界にはかなりの違和感があったが、暗いだけに白球はいつもより、はっきりと追う事が出来る。

生きて2007年に舞い戻るための最低条件、それは、何をさしおいてもとっとと試合を終わらすことだろう。刻一刻と疲労によっ

て生命力を奪われていくのが手に取るように解る。

初球、萎縮してしまった相手投手はいきなりド真ん中にカーブを投げてくれたが、打ち易い球はわざと打ち損じ易い球でもある。

ここはきっちり、キャッチャーフライを打ち上げた。

ベンチに戻って、守備位置に就く。たったこれだけの基本動作が物凄く億劫だ。

この回のシュバルツは、四番の重里からの攻撃。打席に立たれる、たったこれだけのことが、今の孝則にとっては充分過ぎるほどの精神攻撃となった。

重里内野手を三球で葬り、五番の牧を向かえる。一球ごとに坂牧にボールを投げ返さねばならず、それがまた孝則から体力を削り落としていく。まさに生き地獄だった。

牧を二球、続く竜崎も三球で沈め、ベンチへと引き返す。野球というスポーツの特徴である、時間のほうが展開に合わせてくれるという面が、孝則を徐々に追い詰めていった。

2回裏、ラダマンティスの攻撃は、前の回に孝則で終わったため、一番の富樫から始まっている。言うまでも無く孝則はベンチに帰るなり、居眠りの態勢に入った。余程のことが無い限りこの回に自分まで回ってすることは無いだろう。ベンチに座るなり、大口を開けて高聲をかき始める。

森沢は孝則ではなくこの試合自体に取り憑いているのだろうか。漸く廻ってきた睡眠欲を充たせるチャンスは、たったの十分で終わってしまった。せつかくの睡眠が、中途半端なノンレム睡眠に終わってしまったため、却って疲労してしまう始末である。

「俺はあのゲーム、一睡もしなかったんだ。君も寝かせないよ?」

孝則は、森沢からの非常に有難く無いコメントを聞きながら、3回表の守備へと向かった。

イニングが進むに連れ、疲労度が増していく。亡霊に取り憑かれているという特殊な状況も手伝って、見る間に体から力が抜けていった。本当にこんなザマでパーフェクトが取れるのだろうか、心の中で、警鐘を鳴らしている。

試合は3回裏を終了し、4対0とラダマンティスがリードしている。シュバルツはまだ、一人のランナーも出していない。そしてここでまた、『8月14日の男』のおでましとなった。

剣持も孝則も、どちらもこの回は初回とは訳が違った。剣持は初回の過ちを繰り返すまいと気合いを入れ直し、孝則は眠気と疲労でグダグダになってしまっていた。とても囁き戦術を仕掛けている余裕など無い。

必殺の武器を封じられたとなると、後は純粹に配球の組み立てによって打ち取るしか無い訳だが、脳味噌が沸騰しているかのように目眩が絶えない今の孝則には、もはや無理難題に近い要求であると言える。

とにかく外。これが孝則に組み立てることが出来る、精一杯の配球だった。

小生意気にも坂牧が首を横に振ってくる。もう、自分ではどうにも出来ない諦めの境地に達した孝則は、『おまえに任す』のブロックサインを送り、完全に、配球を組み立てることを放棄してしまった。

坂巻からブロックサインが来る。内側低めギリギリに外れるフォークボール。普通、フォークボールは追い込んでから空振り三振に打ち取るために投げるボールのだが、剣持の頭にそれが常識としてインプットされているならば、確かにここでのフォークボールは中々に有効だ。

モーションに入った坂巻から、『頼むからしっかり捕ってください』

いよ』との注文が表情によって付けられている。自分のしようとしていることがすぐ顔に出てしまう、坂牧の悪い癖は昨日今日に始まった話ではないようだ。

8月14日の黒い死神は、初球から孝則の鼓動を止めにかかった。ここに落ちてくるだろうポイントへの寸分狂わないスイング、そして、130キロ後半を捉えるためのタイミングのスイングのスタート。打たれる前からジャストミートされることは解り切っている状態となっていた。

バットの芯がボールを捉える。コンマ数秒の世界だというのに、やたらと流れがゆつたりとしている。死ぬ瞬間の出来事というのはスローモーションに見えるというが、今がその時なのかもしれない。

ジャストミートされたフォークボールは、強打者特有のシュート回転しながら打席方向に飛んで行く当たりとなつて一塁線をワープしているかのような超光速で襲いかかっている。もはや孝則には右方向へと吹いている8mの強風がファールにしてくれることを祈ることしか出来ない。

ボールは残像を残しながらライト線上をすっ飛んでいる。いったい何キロ出ているのだらう。ボールが進むことに寿命が削られて行くようで、とてもじつとしていることなど出来ない。

ヨタヨタと一塁後ろにカバーに向かいながら見送ったボールはもう既にライトポール際に到達している。無回転だったフォークボールに剣持が与えたシュート回転が勝るか、自然災害並の数値を叩き出している風神の息吹が勝るのか、それはもう、野球の神しか知らないところであらう。

打球は、ライト線上スレスレを一直線に進み、ライトポールの外側をかすめ通るようにスタンドに消えた。

ファールボール。

普通の試合であれば入っても然程問題はないのだろう。だが、このゲームには自分の命がかかっているのだ。そして、助かるための唯一の方法は、ランナーを一人も出さないこと。ヒットやホームランは当然として、四球やエラーすらも許されないのである。こんなたかだか4回程度のイニングで打たれる訳にもいかない。

「駄目だよ少年。自分のリードで抑えないと。あの少年が望んでいたのは『キャッチャーのリードによるパーフェクト』だろ」

森沢からのコメントが入る。一々気に障ることを言う男だ。しかも、言っていることが正しいがために余計に気に障るのだ。だが始めから判っていたとは言え、坂牧のリードでどうにか出来る程今日の剣持は甘くない事も確かなようだ。

目の覚める当たりとはよく言ったもので、先程のファールで一時的にはあるが目が覚めてくれたこともあり、この打席に関してはなんとかリード出来そうだ。坂牧に任せろのサインを送り、もう一度組み立て直す。

出来る事なら三球で沈めたい。しゃがみ込むことによって後ろに寄った己の重みを支えるのがようやくとの状態だ。一分一秒でも時間が惜しい。

二球目。初球は内側に落ちる球。いったいここでどういう伏線を張るべきなのだろう。確実に決め球に対する伏線となり、かつ、このボールでも打ち取れる可能性もあり、更に、ストライクなボール。ここではそれが要求される。

決めに使うのは、外高めに外したストレート。それを更に速く見せる球は、遅めの変化球だ。外側のボールを打ちずらくするには、内側に続けるのが有効になる。高めのボール球に手を出させるには……、やや打ち易い球はあるが、高め一杯に入れるのが効き目だけで考えると究極に有効なボールだ。

紛れも無く球界最強の打者と言っていい剣持に対して、内側高めの遅い球。命がかかっている孝則にとつてはひたすらホラーなボールではあるが、試してみる価値は充分に有る。パーフェクトゲームその大記録は、運も見方に付けなければ達成が出来ないものなのである。

もう通用するとはとても思えないが、

「なあ、麻酔針がジンに通じなかったのはなんでだと思う」

と囁き戦術を試してみる。一打席目のこともあり、ここは別に乗つて来なくても勝手に独り言を呟いているだけでも、それなりの効果を期待できるのだ。

「長袖二枚の上からだぞ。それで腕に刺さり込んだりしたらおつちやんなんかとおくに脳幹損傷でくたばってるじゃねーか」

律儀にまた乗ってきた。高めのカーブを坂牧に要求しつつ、

「じゃあ、威力の限界値より、長袖二枚の防御力のほうが高かったってことか」

と二の句を継ぐ。おそらく初回のように為す術も無く見送るようなことは無いだろうが、集中力を乱すことさえ出来れば御の字だ。疲労によつて沸騰している意識が、残された時間が少ないことをリアルタイムで告げてくる。もう、視界が霞んできている状況だ。時間が無い。一刻も早く、この死神をなんとかしなければ。命がかかったデスマッチ。この男さえ抑えれば、なんとか出来る自信は有るのだが。

囁き戦術に答えた坂牧は、ランナーが居ないにも関わらずセットポジションからのクイックモーションで二球目を投げてきた。

「でも前に、蘭のケツに刺さつて『ふにゃ』とか言つて寝たことなかったっけ？」

実際には寝ていないのだが、回答に時間のかかる間違つた問掛けをわざと試みる。

「寝てねえよ」

という最短の回答を出しながら二球目のカーブを剣持が捉えにかかる。さすがはながら族の酋長であるB型だ。ある程度集中力が乱れてもそこそこ力を出せるようだ。

キャッチャーというポジション。そこは、投球の軌道とスイングの軌道、そして、打球の軌道といったボールの動きを全て察知できる特等席だ。

今回の剣持のスイングは明らかに振り始めるタイミングが早すぎた。普通であれば、とてもヒットに出来るタイミングではない。だが、元々とてつもないセンスを持っているうえに、8月14日には最強の守護霊が特別に降臨してくる。タイミングが狂っているが、ポイントはジャストミートできる位置であるがために、孝則の鼓動もいくらか早くなり始めていく。

少しばかり嫌な汗が顔から背から流れ落ち始める。剣持は、振り始めのタイミングのズレを途中でバットを止めることで修正してきた。こうなったらもう、ポテンヒットでもなんでもいいからとにかくパーフェクトを阻止しようという企みか。

そんなことをされては堪らないが、ここは内野手の判断力に期待するしかない。高めのカーブは、剣持が止めたバットの芯に当たり、案の定ブッシュバントと同じような微妙なポップフライとなってレフト、サード、ショートの間にはフラフラとヨロヨロと上がっている。二人の内野手と一人の外野手がそのトライアングルの真ん中に落ちようとしている白球に向かい、猛ダッシュをかけている。

まずはショートの真熊が追うのを止める。次いで、サードの長峰が止まる。中々の好判断と言えるだろう。フライは、後ろ向きに追うより前から突っ込んだほうが正確に追えるのだ。

捕球の責任をレフトの飛鳥に一任された打球は相変わらずやる気が無さそうにフラフラと人工芝の境目辺りに落ちようとしている。元々大きな当たりに備えて深めに守っていた飛鳥であるだけに、も

はやダイビング無しには間に合わないタイミングだ。

「飛鳥さん、飛べえ！」

孝則の心の底からの叫びがデスマッチフィールドに響き渡る。

霊体憑衣によって寒気すら催している孝則に、夏場に似つかわしいレベルの発汗をさせている死神の一撃を、飛鳥がリクエスト通りすつ飛んでの捕球を試みる。

今日の試合はスローモーションになる場面がやけに多くて心臓に良くない。今回もまた、スローというより連続写真のようなストツブモーシヨンとなつて、飛鳥左翼手と死神の一撃との死闘が孝則の目に飛込んできた。

必死に右手を伸ばして飛鳥が打球に攻撃を仕掛ける。そしてそれは、きつちりとグラブに納まった。

だが、ダイビングキャッチの最大の難点は捕った後なのである。たとえ一旦グラブに納まったとしても、着地のショックで溢してしまふとそのままインプレーとなつてしまふ。剣持は既に一塁ベース上でプレイの行く末を見守っていた。落とせば即、シングルヒットが記録されることとなる。

つんのめるような体勢で着地した飛鳥は、中途半端な大怪我をしてのたうち回る負傷者のように、もんどりうつて転げ回るという最悪なパフォーマンスを見せてくれている。

「落とすなあ！」

疲れている時の大声は禁物であることは解り切つてはいることなのだが、それでも孝則は声援を送らずにはいらなかった。右手を胸の真ん中に当て、ガクガクと痙攣しているかのように大きく震えている。自分でもはつきりと感じ取れるほど、脈動が安定していない。

一回転。

二回転。

三回転。

体育のマット運動のように回り続けた飛鳥の回転が止まったとき、ボールは……、グラブに納まったままだった。

後続をきつちり抑え、7回表を迎えている。今までも一人の出塁も許しておらず、パーフェクトゲームを継続中だ。この回。この回である。8月14日の黒い死神、剣持和俊最後の打席。

奴は、この回の先頭打者として回ってくる。ここを抑えることが出来ればもう、パーフェクトは達成出来たも同然と言えるだろう。そう確信して気を抜かない限りは、手の届く位置まで来ている。大友孝則がプロ野球選手として生きる2007年が、直ぐそこまでやって来ているのだ。ここで打たれる訳にはいかない。

格闘ゲームで言うなら、ラスボスのおでましと言ったところだろうか。これを倒すと、エンディングはグッと近付いてくる。

霞む目をカッと見開いて、瞬きもせずじつくりと様子を観察すた。おそるべきことに剣持は、囁き戦術対策として耳栓を着用している。すわパーフェクトかと球場全体がにわかに騒ぎ始めた7回表、シユバルツファンの希望は、昨年の新人王を獲得し、高卒でありながらスタメンに名を列ねる剣持に託されていた。

囁き戦術は一切通用しない状況となった。組み立てだ。もうそれしか使える技が無い。これだけでも剣持にとってかなり有利な状況となってしまうた。さすがは後にプロ野球を代表する大打者となる男、この辺は抜け目のない仕事をしてくる。

初球。今までの打席は確か、全てが変化球だった筈だ。勿論ここはストリート。球数が百球を超えて坂牧もだんだんボールに力が無くなってきている。高めは禁物だ。もしここで高めに行こうものなら間違い無く、この日一番の恐怖が襲いかかることになる。

外低めへのストリート。今までが、内内へと投げて、最後に外というパターンだったため、ここで外は、そこそ有効だ。

外気温は一切無関係の霊下1 ぐらいの体感温度に取り囲まれた孝則は、このボールに対する剣持の対応に、更に寒い思いをすることになる。まるで待ってましたというようなスイングがボールが来るだろうポイントへ、打ち下ろされている。

パーフェクトが達成されるゲームには必ずファインプレーが出て、運の良さも発揮されるという。まだ発揮されていない強運が、ここで発揮されることを野球の神に、否、ラダマンティスの守護神である森沢英勝に心から哀願する。この勝負の行く末は、どう見積もってもこのままではライトスタンドにぶち込まれるビジョンしか浮かんでこない。

「曲がれ！」

沈め！

何でもいいから変化しろ！」

剣持が耳栓を付けているため、なり振り構わず喚き散らす。ファウルカップ標準装備であるため、ユニホームへと染み広がることはなかったが、下着は既に生暖かく湿っている。余程の奇跡が起らない限り、確実にスタンドへと持っていられるスイングだ。命を賭けてパーフェクトを達成しなければならない孝則のことである。無理も無いだろう。

力の落ちている坂牧の魂めがけて打ち下ろされた死神の大鎌は、そのまま魂を刈り取るうとしている。

だが、魂は黙って刈られることは無かった。疲れが握力に影響を及ぼし、只のストリートだった筈のボールが打者の手前で微妙に沈

むムービングボール（ツーシーム）となっていたのだ。

今度は逆に、死神が追い込まれる番だ。

「んおあああ！」

なめんなああ！」

雄叫びをあげながらももう既にトップスピードに乗ったスイングの軌道を強引に修正してくる。

「前だああ！」

孝則も負けじと叫ぶ。この当たりがフェアグラウンドへと転がってくれと、確実に内野ゴロとなってくれる。

剣持が狙った軌道修正。それは、ミートしようとする下方修正ではなく、空振りもしくは、ファールチップを狙った上方修正だったようだ。この瞬時の決断力も、この男を大打者にのしあがらせた要因と言えるだろう。

結局ボールは、しゃがんでいる孝則のミットに納まっていた。

死神は、二球目のストレートを敢えて見送ってきた。初球の事もある。ここは慎重に球筋を見極めてきたのだろう。打つために敢えて追い込まれる剣持の冷静さに、孝則が震え上がる。

三球目。これで、勝負を決めに行く。二球目は普通のストレートとなつてストライクゾーンに入っている。ストレートかツーシームか、この見極めは、なかなか難しい。

だから、ミートすることを捨てたのだろうか、この後剣持は予想だにしない行動に出た。

セーフティーバント。

外の高めに投げたストレートをあらかじめ寝かせたバットが捉える。その打球は、三塁線の、まさに真上を転がっている。

「さわんなあ！」

孝則が叫ぶ。

ファールになれば三振となり、問答無用でアウトなのだ。

切れること無く三塁線を転がり続けた球は、遂にラインの左側に行き、三塁ベースに当たった。スリーバント失敗による三振。

こうして、死神をことごとく退治し続けた坂牧は、最後の打者を三振に打ち取ってパーフェクトを達成した。

パーフェクトゲームを達成し、ベンチへと引き上げてきた孝則はもう限界に達していた。肉体的にも精神的にももはや限界で、帰って来るなり倒れる様に座り込んでしまう。

「おめでとう少年。これで君が命を張って助ける価値のあるキャッチャーだって証明になっただろ」

確かに最近是不振でラダマンティス創立以来の五位という体たらく。その責任を、始めは投手陣に追求していたが、最近捕手のリードが悪いと言われ始めていた。そして、いつもその槍玉に上がるのが正捕手である孝則だったのだ。当然自信も無くなってくる。正直最近、引退すらも考えていた。

「君が自信を持ってくれたお陰で、やっと君の後悔の鎖が外れてくれたよ。悪かったね、荒療治で。成仏するには君が絡めた鎖を君に外してもらいしか無かったんだ」

確かに今回のことで、かなり自信は付いた様に思う。それが成仏に繋がるならそれに越したことはない。

「じゃあ、還るか。」

森沢が手を差し延べる。それに捕まると、その霊体共々天に上がっていく。

そして、気付いたときには、孝則は大友孝則として森沢神宮の前に倒れていた。

この瞬間が、大捕手大友孝則が誕生した瞬間となる。きっとこの日を彼は一生忘れることは無いだろう。

後編（後書き）

よくよく考えると、ホラーではなく野球ファンタジーのような気配がプンプン漂っている感じがします。申し訳ありませんm（――）m

パーフェクトを達成することに命がかかっているゲームで迎える最強打者の一挙一動に対する恐怖を少しでも感じていただけると幸いです（＾Ｏ＾）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4978c/>

魂が魂を呼び、魂によって解き放たれる

2010年10月8日12時20分発行